2013/10/04

日本語の複合動詞研究の諸相

奥田　智樹

1. はじめに

複合語・複合動詞とは

複合動詞：動詞を後部要素として、これに動詞、または他の品詞が複合してできた動詞。「呑み込む」「恥じ入る」「長びく」「相手取る」「値する」の類。→複合語。

複合語：本来それぞれ独立の言語要素が、二つ以上結合して、新たに単純な一語としての意味・機能をもつようになったもの。「やまがわ(山川)」「ゆうやけ(夕焼)」「とおあさ(遠浅)」「はやおきどり(早起鳥)」「おちつきはらう(落着払)」など。[以下略]

『日本国語大辞典　第二版』小学館

複合語：単語を語構成の面から共時的に見た場合の一類の名称。本来、単独の用法をもつ二つ(以上)の単語が結合して新たに一語としての意味・機能をもつに至ったもの。[中略]複合語の品詞は、名詞(春風・花見・つり橋)、動詞(聞き入れる・遠のく)、形容詞(重苦しい・名高い)、形容動詞(声高、話し上手)、副詞(心もち・なおかつ)など広い範囲にわたっているが、複合名詞が最も多く、次いで複合動詞となり、複合形容詞・複合形容動詞・複合副詞はずっと少ない。複合語の品詞は、多くの場合、その最終要素となる単語の品詞によってきまる。前の成分には、普通、動詞の場合は連用形、形容詞・形容動詞の場合は語幹が用いられる。[以下略]　『日本語学研究事典』明治書院　2007

2. 品詞面から見た複合動詞の結合パターン

国立国語研究所『語彙の研究と教育(上)』(1984)によれば、複合動詞の主な結合パターンは以下のとおりである。

(1) 動詞＋ 動詞

呼び寄せる、聞きとがめる、吐き出す、飛び回る、申し込む、受け付ける、降り始める、書き終わる

(2) 形容詞、形容動詞語幹＋ 動詞

近寄る、若返る、多すぎる、長引く、高鳴る、遠のく、暑がる、元気づく、正直ぶる

(3) 名詞＋ 動詞

名指す、泡立つ、色づく、習慣づける、手がける、目指す、基づく、外泊する、勉強する、

(4) 副詞＋ 動詞

ピカピカする、ぼんやりする、しみじみする、ニコニコする

そして、派生語として以下の二類もある。

(5) 音象徴語＋ 接尾辞(派生語)

ざわめく　びくつく　うろつく　はためく　しょぼくれる

(6) 名詞＋ 接尾辞(派生語)

色めく 艶めく 汗ばむ 時めかす

狭義的複合動詞とは、上記の(1)のもの、つまり「前項動詞の連用形＋ 動詞」の形だけを指す。この結合パターンは日本語言語学の研究分野でよく扱われるケースである。ここではこれだけを視野に入れて検討することにする。(「動詞のテ形＋動詞」(例：食べて帰る、泣いている、食べてしまう、あけておく)は検討対象とはしない。)

3. 体系的研究－結合条件及び分類に関する研究

複合動詞の結合条件及び分類に関する研究には大きく分けて二つの流れがある。一つは寺村(1969)を出発点として長嶋(1976)－山本(1984)につながる記述的な視点に立つ研究の流れである。一方、影山(1993)は、抽象性の高い意味論(「概念意味論」)の枠組みで分析をおこない、その流れはその後、由本(1996)、松本(1998)に批判的に継承されている。以下ではまず、3.1.で「寺村－長嶋－山本」の研究を概観し、3.2.で「影山－由本－松本」の研究を概観する。

3.1. 日本語学及び国語学における研究(「寺村－長嶋－山本」の流れ)

3.1.1. 寺村(1969)

寺村は複合動詞の前項と後項の意味に着目し、それぞれの意味が複合動詞になっても保持されているかどうかの観点から 4 類型に分類した。

(a) 自立V＋自立V…… (例) 走り去る、持ちあげる

(b) 自立V＋付属V…… (例) 走り込む、見上げる

(c) 付属V＋自立V…… (例) とり押さえる、打ち眺める

(d) 一体化したもの…… (例) とりなす、のり出す

ここで「自立(的)」、「付属(的)」というのは、自立語として独立に使われる時の意味がそのまま保持されているか、否か、ということである。

3.1.2. 長嶋(1976)

長嶋(1976)は、結合条件を寺村とは別の観点から 2 類型に分類している。

Ⅰ類：v_1＋V_2 (修飾要素＋被修飾要素)

「Nが(を・に) v_1」とも言えるし、「Nが(を・に)V_2」とも言えるもの。

例 「(木を)切り倒す」、「(町内を)見廻る」、「(木に)よじのぼる」等。

(木を切り倒す ⇒ 木を切る、木を倒す)

Ⅱ類：V_1＋v_2 (被修飾要素＋修飾要素)

「Nが(を・に)V_1」とは言えるが、「Nが(を・に) v_2」とは言えないもの。

例 「(本を)読み通す」、「(犬が子供に)噛みつく」、「(インクが紙に)しみこむ」等。

(犬が子供に噛みつく ⇒ 犬が子供を噛む、*犬が子供につく)

長嶋の分類は、Ⅰ類とⅡ類の分類基準が明示された点で寺村を一歩進めたものであると言える。

3.1.3. 山本(1984)

山本(1984)の研究は、上記の寺村と長嶋を融合したものである。山本は、複合動詞の格成分が前項動詞または後項動詞とどのような対応をみせるかに着目した。そして、その明示的な基準により、複合動詞を以下の4類型に分類した。

Ⅰ類：複合動詞の格成分が、前項動詞と後項動詞のそれぞれに対応関係にあるもの
　雪が降り積もる＝雪が降る、雪が積もる
　犬が芝生を踏み荒らす＝芝生を踏む、芝生を荒らす

Ⅱ類：複合動詞の格成分が前項動詞とは対応を示すが、後項動詞とは対応しないもの
　雨が降り出す＝雨が降る、*雨が出す
　ご飯を食べすぎる＝ご飯を食べる、*ご飯を過ぎる

Ⅲ類：複合動詞の格成分が後項動詞とは対応するが、前項動詞とは対応しないもの
　期限が差し迫る＝*期限が差す、期限が迫る
　事故を引き起こす＝事故を起こす、*事故を引く

Ⅳ類：複合動詞の格成分が前項動詞とも後項動詞とも対応しないもの
　味が引き立つ＝*味が引く、*味が立つ
　事故を取り締まる＝*事故を取る、*事故を締まる。

山本の研究は、寺村が「意味的な観点」から分類したのに対して、「前項動詞と後項動詞の格支配がどのような形で関わり合っているのか」という「統語的な観点」から分類されたものである。

3.2. 言語学的研究 (「影山－由本－松本」の流れ)

3.2.1. 影山の研究 (1993, 1996, 1997)

影山は「概念意味論 (conceptual semantics)」の枠内で「語形成」という観点から複合動詞を扱っている。影山(またはそれに続く由本、松本)らの分類は、複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」があるという立場に立脚した分類である。以下にそれぞれの例を挙げる。(影山 1997, p.68)

統語的複合動詞：話し終わる、払い終える、話し始める、しゃべり続ける、歩き過ぎる、食べそこなう、しゃべりまくる、飲みかける、読み直す、見慣れる、書き忘れる、乗りそこねる、鍛え抜く

語彙的複合動詞：飛び上がる、沸き立つ、押し開ける、書き込む、吸い取る、受け取る、貼り付ける、探し歩く、飲み歩く、恋い慕う、誉め讃える、語り明かす、遊び暮らす、泣き叫ぶ、泣きはらす、勝ち抜く

統語的複合動詞とは2つの動詞が補文関係をとるものを指す。

例：「働きすぎる」⇒「働くことがすぎる」 (前項動詞が後項動詞の主語となる関係)
　「話し終える」⇒「話すことを終える」 (前項動詞が後項動詞の目的語になる関係)

語彙的複合動詞とは2つの動詞が補文関係をとらないものを指す。

例：「泣き叫ぶ」 「泣く」と「叫ぶ」の並行動作を表す。
　「泣きはらす」 「泣く」は「はらす」の原因を表す

統語的複合動詞と語彙的複合動詞の統語構造における違いを示す現象

①「そうする」が使えるか。

統語的複合動詞：花子はテレビを見すぎる。→ 太郎もそうしすぎる。

語彙的複合動詞：花子はプールに飛び込んだ。→ *太郎もそうし込んだ。

② 受身形ができるか。

統語的複合動詞：読み始める → 読まれ始める

語彙的複合動詞：名前を書き込む → *名前が書かれ込む

③ 主語尊敬表現がつけられるか

統語的複合動詞：先生が手紙をお書きになり始めた。

語彙的複合動詞：*先生が名前をお書きになり込んだ。

この語彙的複合動詞の組み合わせはさらに5類型に分けられる。ここで5類型を提示する前に、動詞の種類について確認しておきたい。

影山(1997)は、非対格性(unaccusativety)という概念を日本語に当てはめて、日本語動詞を他動詞、非能格自動詞(unergative)、非対格自動詞(unaccusative)の3種類に大別する。つまり、自動詞には「非能格自動詞」と「非対格自動詞」の 2 種類があるということである。大まかな目安としては、非能格自動詞は主として生物の意志的活動を表し(意志動詞)、非対格自動詞は人間の意志的作用が係わらない、自然発生的ないし自発的な出来事を表す(無意志動詞)と考えればよい。

例：

①	こどもが	花瓶を	割った。(他動詞)
	x	<y>	
②	こどもが		走っている。(非能格自動詞)
	x	< >	
③		花瓶が	割れた。(非対格自動詞)
		<y>	

影山(1997)は動詞の種類を上記の3種類に大別した上で、それぞれの動詞の項構造を次のように説明している。概念意味論では他動詞の「主語」「目的語」という用語を使わず、それぞれを「外項 (external structure)」「内項 (internal structure)」と呼んでいる。つまり外項は動作をする側、内項は動作を受ける側である。これを自動詞に当てはめた場合、非能格自動詞(意志自動詞)の主語は外項に相当し、非対格自動詞(無意志自動詞)の主語は内項に相当すると考えられている。以下の表示では x が外項、y が内項を表す。

① 他動詞の項構造： (x < y >)

例：割る、読む

② 非能格自動詞の項構造： (x < >)

例：走る、歩く

③ 非対格自動詞の項構造： (< y >)

例：割れる、折れる

そして、「語彙的複合動詞」の組み合わせは次のような制約条件をもつことを指摘した。(* は結合できない例)。

a. 他動詞＋他動詞：奪い取る、追い払う、引き抜く、射落とす
b. 非能格＋非能格：言い寄る、飛び降りる、走り寄る、泣き伏す
c. 非対格＋非対格：滑り落ちる、立ち並ぶ、はえかわる、生い茂る
d. 他動詞＋非対格：*洗い落ちる、*染めかわる、*倒し滑る
e. 非能格＋非対格：*走りころぶ、*跳び落ちる、*回り落ちる
f. 非対格＋他動詞：*揺れ落とす、*売れとばす、*滑り削る
g. 非対格＋非能格：*崩れ伏す、*痛み泣く、*ころがり降りる
h. 他動詞＋非能格：探し回る、待ち構える
i. 非能格＋他動詞：泣きはらす、伏し拝む、笑い飛ばす

即ち、語彙的複合動詞の組み合わせは、基本的には外項の有無、つまり外項 x をとる動詞同士か、外項 x をとらない動詞同士によって作られるというのが影山の主張である。例えば、「a. 他動詞＋他動詞」「b. 非能格自動詞＋非能格自動詞」の組み合わせは外項 x をとる動詞の組み合わせであり、「c. 非対格自動詞＋非対格自動詞」は外項 x をとらない動詞の組み合わせである。これらの制約を簡単な表にあらわすと、次のようになる。

語彙的複合動詞の組み合わせ

V1 / V2	他動詞 (+x)	非能格自動詞 (+x)	非対格自動詞 (−x)
他動詞 (+x)	a (○) (奪い取る)	i (○) (泣きはらす)	f (×) (揺れ落とす)
非能格自動詞 (+x)	h (○) (探し回る)	b (○) (言い寄る)	g (×) (崩れ伏す)
非対格自動詞 (−x)	d (×) (洗い落ちる)	e (×) (走りころぶ)	c (○) (滑り落ちる)

この制約を影山は「**他動性調和の原則**」と呼んでいる。因みに、統語的複合動詞にはこの制約はない。

3.2.2. 由本(1996)、松本(1998)の研究

由本(1996)と松本(1998)は、影山の「他動性調和の原則」に対して異論を唱えている。影山は非対格自動詞と非能格自動詞を区別する基準として、間接受身の可能性(非能格自動詞のみが間接受動化を許す：私は子供にさわがれた　*私はおじいさんにころばれた／亡くなられた)や命令形の可能性(非能格自動詞のみ命令形が可能)を掲げている。そして、これらに基づいて「降る」や「死ぬ」を非能格自動詞だと認定して、「降り暮らす」や「死に別れる」が可能であることを説明している。しかし、松本は「降る」や「死ぬ」を非能格動詞と認定すると、「降り積もる」「死に絶える」「焼け死ぬ」のように「積もる」「絶える」「焼ける」(これらは非対格自動詞)と結合する複合動詞の説明が出来ないと批判している。

由本、松本はそれぞれ、「他動性の調和の原則」に変わるものとして「**主語一致の原則**」を提案している。「主語一致の原則」とは、通例、二つの動詞の主語として実現する項が同一物を指す、というもので、主語になるものであれば外項同士(あるいは内項同士)である必要はない。この点で「他動性調和の原則」よりも緩い制約である。松本による「主語一致の原則」の定式化を以下に示す。

主語(卓立項)一致の原則：二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者(通例、主語として実現する意味的項)同士が同一物を指さなければならない。

そして松本は、これに意味構造に課せられた意味的諸条件が重なって各タイプの複合動詞が制約される、とする。その際、他動性調和の原則にあった複合動詞しか認められない意味タイプもできるが、それに合わない複合動詞が認められる意味タイプも存在することになる。

前項が後項の手段を表すもの (松本(1998), p.52)

押し倒す、たたき落とす、打ち上げる、押し出す、掃き集める、投げ飛ばす、切り抜く、だまし取る、ちぎり取る、取り除く、焼き付ける、折り曲げる、たたき壊す、踏み固める、蹴り崩す、殴り殺す、洗い清める

これらの手段複合動詞は全て、他動詞＋非能格の組み合わせとなる。

前項が後項の様態・付帯状況を表すもの (松本(1998), p.53)

a. 意志的＋意志的　駆け登る、駆け降りる、舞い降りる、滑り降りる
b. 意志的＋中立的　駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き回る
c. 非意志的＋非意志的　流れ落ちる、舞い落ちる、滑り落ちる
d. 非意志的＋中立的　流れ出る、浮き上がる、舞い上がる、吹き回る

前項が後項の原因を表すもの (松本(1998), p.55)

a. 非動作主的＋非動作主的：降り積もる、おぼれ死ぬ、焼け死ぬ、抜け落ちる、あふれ落ちる、焼け付く
b. 動作主的＋非動作主的：泣きぬれる、泣き沈む、飲みつぶれる、食いつぶれる、働きくたびれる、走りくたびれる、走り疲れる、立ち疲れる、読み疲れる、聞き知る、寝違える
c. 非動作主的＋動作主的：*疲れ座る、*転び叫ぶ、*白け帰る、*恐れ去る
d. 動作主的＋動作主的：*聞き帰る、*見向かう、*見逃げる、*食べ叫ぶ

これらの原因複合動詞においては、結果を表す後項動詞が非動作主的でなければならない。

並列関係 (影山(1993), p.99; 由本(1996), p.106)

こいねがう、恋い慕う、忌み嫌う、媚びへつらう、思い描く、思い煩う、あわてふためく、泣き叫ぶ、耐え忍ぶ、驚きあきれる、恐れおののく

4. 意味研究ー個々の複合動詞後項の意味に関する研究

複合動詞の意味的側面に着目した研究を切り開いたのは、姫野の一連の研究(1975, 1976, 1977, 1978a, 1978b, 1980, 1982, 1999)である。姫野は、「～つく」「～つける」「～あがる」「～あげる」「～でる」「～だす」「～こむ」「～かかる」「～かける」「～きる」「～ぬく」「～とおす」「～あう」「～あわせる」など複雑な多義的後項動詞の意味・用法を整理・分類し、さらには類義語との意味的差異を明らかにした。姫野以降のこのテーマに関する研究の大半は、姫野の研究に刺激を受けたものである。これらの姫野の一連の研究によって複合動詞の意味研究は大きく進展したと言ってよい。

例：「開始・起動」をあらわす「～だす」「～始める」

姫野(1999, p.97)は「開始・起動」をあらわす「～だす」の基本義は「内部に込められていたものが何かのきっかけでどっと外部に出て、ことが始まる」ことであり、「そこには、人為的な力の作用というよりは、内部からあふれた自然なエネルギーの流出が感じられる」として、「～始める」と「～だす」の相違点を以下の5点にまとめている。

(1) 感情の動きをあらわす語は「～だす」の方が適している。「不意に、急に、ふとしたことで」のような修飾語を伴って突発性が強調される。例:怒る(怒り出す　?怒り始める)

(2) 不測性を強調する場合は「～だす」の方が適している。例：言い出す(今になって立ち退かないなどと、言い出されても困ります。)

(3) 音の自然発生をあらわす場合は「～だす」の方が適している。例：電話が鳴る(電話が鳴りだす　?電話が鳴り始める)

(4) 「今にも～しそうだ」という現実化の直前の様相をあらわす場合は「～だす」の方が適している。
例：降り出す(今にも雨が降りだしそうだ。?今にも雨が降り始めそうだ。)

(5) 「～だす」は意志的表現にはそぐわない。
例：?早くやりだせ！　早くやり始めろ！／?今すぐ読みだしたい　今すぐ読み始めたい

因みに、「～だす」「～始める」と同様に「開始・起動」をあらわす「～かける」については、「～だす」と「～始める」がその動作・作用が続行し、終了に至ることが予想できるのに対して、「～かける」は中断や中止が前提とされることが多いと述べている。

今井(1993)はこの「開始・起動」をあらわす「～だす」を取り上げ、本動詞「出す」からの意味派生のプロセスに着目している。今井は「～だす」の基本義を「内部からあふれた自然なエネルギーの流出」であるとする姫野の指摘に対して、

① 「自然発生的な、突発的なエネルギーの流出」は「出る」の基本義であって、「出す」の基本義ではない。「～始める」と置きかえられるのが、何故「～でる」ではなくて「～だす」なのかという疑問に答えることができない

② 「出す」の単独用法の意義と複合動詞後項の意義のつながりを十分に明らかにしたとは言えない

と批判し、「開始・起動」をあらわす「～だす」の意味は単独用法「出す」とどのような関わりをもっているのかを認知意味論のイメージ・スキーマという手法を用いて考察している。そして単独用法「出す」がどのような意味派生のプロセスを経て「開始」の意味をあらわすようになるのかを明らかにしている。(次頁参照)

「～出す」が《事態の出現》を表すなら、《出現》を表す自動詞「出る」ではなく、《出現の使役》を表す他動詞「出す」が使われているのはなぜかという問題が生じる。今井(1993)では、使役者だったガ格名詞句が参照点となり、更にそれが主観化されているとした。

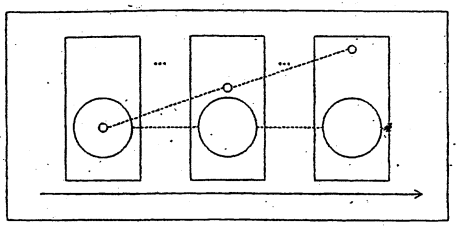
《出現》には元から参照点があることや、ガ格名詞句が単なる参照点にはなっていないことから、今井(1993)の説明は妥当でない。

? あの {森 / 山} はこの3年で2回も火事を出した。

この他に、李(1997)は「～きる」を取り上げ、本動詞「切る」の多義的意味と複合動詞後項の多義的意味の対応関係を示している。「～きる」には「完遂」をあらわす用法(走りきる、上りきる)、「極限」をあらわす用法(疲れきる、退屈しきる)、「自信満々」をあらわす用法(演じきる、言いきる)などが指摘されている(森田 1978、姫野 1980 など)が、それらの用法が本動詞「切る」から派生するものだとし、その派生のプロセスを記述している。しかし、両者の多義的意味の対応関係に関する細部の議論には首肯しがたい点もあり、実証性に問題があることは否めない。

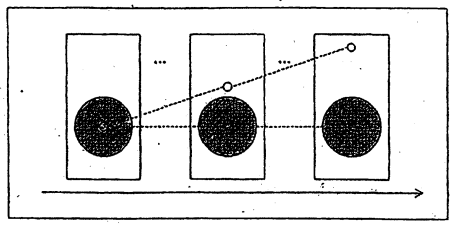
今井(1993)

「出る」：外部への移動のスキーマ



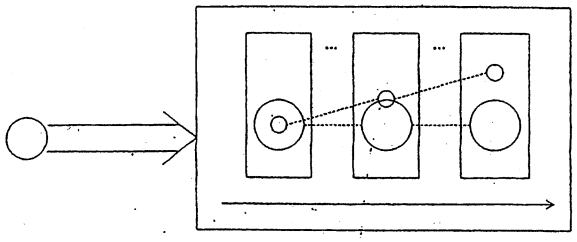
進は部屋から出た
ホースから水が出る

「出る」：出現・発生のスキーマ



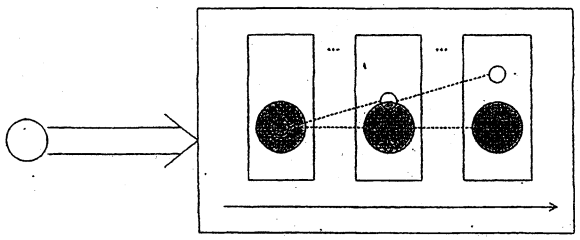
この寺にはお化けが出る
風邪をひいて熱が出る
列車事故でけが人が出る

「出す」：外部への移動の使役のスキーマ



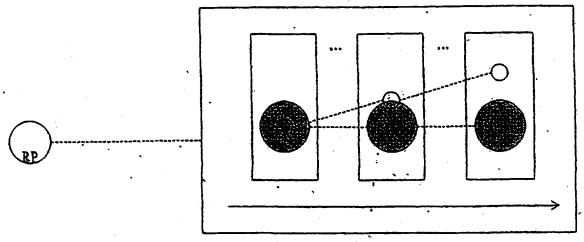
一弘がポケットからタバコを出した
昭子が車から手を出した

「出す」：出現・発生の使役のスキーマ



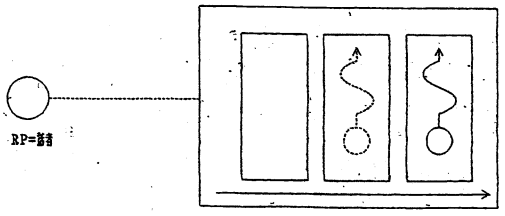
手品師が(なにもないはずの帽子の中から)
鳩を出した
A 大学はノーベル賞受賞者を 10 人も出した

「出す」：ある場所における出現・発生



あの家はこの 3 年で 2 回も火事を出した

複合動詞後項「～出す」：話者によって結果が知覚可能な事態の生起のスキーマ



5. 複合動詞習得をめぐる問題

松田(2004)では、大学院で日本語教育を専攻する留学生13名を対象に「複合動詞のどのようなところが難しいと感じているか」についてアンケート調査をおこなった。その結果を要約すると、以下の3点にまとめられる。(p.2)

(1)「結合条件」に関するもの：

① どんな動詞と結びつくのか分からない。そのため勝手に単語を作り出す危険性がある。(⇒過剰般化につながる)

(2)「単純動詞」と「複合動詞」の使い分けに関するもの：

② 「書きこむ」という言葉は知っていても「書く」と「書きこむ」をどう使い分けてよいか分からない。そのため「書きこむ」の方が適切な場合であっても「書く」で間に合わせてしまう。(⇒使用の回避につながる)

③ 「～こむ」の意味は「飛びこむ」のような事例から「中に入る」ことだと思っている。しかし「入りこむ」や「埋めこむ」は「入る」や「埋める」自体がすでに「中に入る」ことなのに、なぜ「～こむ」をつけるのか分からない。(⇒意味構造に関する理解の混乱)

(3)「習得の方法」に関するもの：

④ 「～きる」や「～こむ」などと結合する複合動詞の数は非常に多く、その意味は単に「V1の意味＋V2の意味」だけでは理解することができない。(⇒「V1＋V2」ストラテジーの限界)

⑤ 「座る」(単純動詞)と「座りこむ」(複合動詞)の意味の違いを知りたい時辞典を引くが、説明が十分ではない。(⇒入手できる辞典の限界)

⑥ V1の意味とV2の意味を足してもその意味が分からない時、それぞれを母語に対訳して理解しようとするが、あまり効果がない。(⇒対訳ストラテジーの限界)

(参考)　森田(1978)による、既採集複合動詞 2,644 語を対象とした、動詞の複合化に対する造語力の調査 (pp.74-75)

〈調査 1〉 上接部に立つことの多い動詞ベスト 25。～印は、そこに下接動詞(または動詞的造語成分や接尾辞)が来ることを示す。

順位	動　詞	複合動詞数	順位	動　詞	複合動詞数
1	見　～	83	14	思い～	28
2	取り～	73	15	し　～	27
3	言い～	63	16	振り～	25
4	引き～	51	17	踏み～	24
5	打ち～	38	18	乗り～	23
6	聞き～	35	19	掻き～	22
6	切り～	35	19	食い～	22
8	書き～	34	19	飛び～	22
9	押し～	30	22	吹き～	19
9	立ち～	30	22	持ち～	19
9	突き～	30	22	読み～	19
9	引っ～	30	25	呼び～	17
13	差し～	29			

〈調査 2〉 下接部に立つことの多い動詞ベスト 25. ～印は、そこに上接動詞(または接頭辞など)が来ることを示す。

順位	動　詞	複合動詞数	順位	動　詞	複合動詞数
1	～込む	135	14	～掛ける	39
2	～付ける	102	15	～掛かる	28
3	～付く	97	16	～入る	27
4	～出す	93	17	～出る	24
5	～上げる	82	17	～抜く	24
6	～合う	63	19	～入れる	23
7	～立てる	54	20	～落とす	21
7	～取る	54	20	～回る	21
9	～切る	50	22	～反る	20
10	～立つ	46	22	～直す	20
11	～立たせる	45	24	～張る	18
12	～上がる	43	24	～回す	18
13	～返す	42			

参考文献

- 李暻洙(イキョンス) 1997「中間的複合動詞「きる」の意味用法の記述－本動詞「切る」と前項動詞「切る」、後項動詞「－切る」と関連づけて」,『世界の日本語教育』7, pp.219-232.
- 今井　忍 1993「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ－「～出す」の起動の意味を中心にして－」,『言語学研究』12, 京都大学, pp.1-24.
- 影山太郎 1993『文法と語形成』, ひつじ書房.
- ――― 1996『動詞意味論―言語と認知の接点―』, くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 1997『語形成と概念構造』日英比較選書 8　研究社出版.
- 斉藤倫明 1984「複合動詞構成要素の意味－単独用法との比較を通して－」『国語語彙史の研究 五』, 和泉書院, pp.399-414.
- 武部良明 1953「複合動詞における補助動詞的要素について」『金田一博士古稀記念 言語民族論叢』, 三省堂, pp.461-476.
- 寺村秀夫 1969「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト―その一―」,『日本語・日本文化』1, 大阪外国語大学研究留学生別科, pp.32-48.
- 長嶋善郎 1976「複合動詞の構造」,『日本語講座 4　日本語の語彙と表現』, 鈴木孝夫編, 大修館書店, p.63-104.
- 姫野昌子 1975「複合動詞『～つく』と『～つける』」,『日本語学校論集』2, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, pp.52-71.
- ――― 1976「複合動詞『～あがる』、『～あげる』および下降を表す複合動詞類」,『日本語学校論集』3, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, pp.91-122.
- ――― 1977「複合動詞『～でる』と『～だす』」,『日本語学校論集』4, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, pp.71-95.
- ――― 1978a「複合動詞『～こむ』、および内部移動を表す複合動詞類」,『日本語学校論集』5, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, pp.47-70.
- ――― 1978b「複合動詞『～かかる』と『～かける』」,『日本語学校論集』6, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, pp.37-61.
- ――― 1980「複合動詞『～きる』と『～ぬく』,『～とおす』」,『日本語学校論集』7, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, pp.23-46.
- ――― 1982「対称関係を表す複合動詞－『～あう』と『～あわせる』をめぐって－」,『日本語学校論集』9, 東京外国語大学附属日本語学校, pp.17-52.
- ――― 1999『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 松田文子 2002「複合動詞研究の概観とその展望－日本語教育の視点からの考察－」,『言語文化と日本語教育．増刊特集号，第二言語習得・教育の研究最前線：あすの日本語教育への道しるべ』, pp.170-184.
- ――― 2004『日本語複合動詞の習得研究―認知意味論による意味分析を通して―』, ひつじ書房.
- 松本　曜 1998「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」,『言語研究』114, pp.37-83.
- 森田良行 1978「日本語の複合動詞について」『講座 日本語教育』14, 早稲田大学語学教育研究所, pp.69-86.
- 山本清隆 1984「複合動詞の格支配」『都大論究』21, 東京都立大学, pp.32-49.
- 由本陽子 1996「語形成と語彙概念構造－日本語の『動詞＋動詞』の複合語形成について－」, 奥田博之教授退官記念論文集『言語と文化の諸相』, 英宝社, pp.105-118.